

ノーラン監督が原爆製作者の苦悩を描いた「オッペンハイマー」を観ました。3時間の大作ですが、原爆の研究開発をニューメキシコ州のロスアラモスに研究所をつくって進めていくのですが、第1回目の実験の成功が日本の敗戦の1カ月前であったことが史実に基づいて忠実に描かれていました。日本の多くの都市がB29の空爆を受けて敗戦が決定的であった状況の中で、後は日本政府が国体の維持での交渉が食い違っていただけの状況の中でヒロシマ、ナガサキへの原爆投下がなされたのです。

先週の土曜日15日の朝日新聞に映画監督の山田洋次さんがオッペンハイマーを見たことでの記事を書いていました。その時、山田監督は「幸せの黄色いハンカチ」の原作者であるピート・ハミルさんのことを思い出したというくだりで、ハミルさんが小学生の時に、長崎への原爆投下の新聞記事を手にした母親が朝食の時に「愚か者のトルーマンが日本のクリスチャンが大勢いる街に恐ろしい爆弾を落としました。犠牲になった日本の信者のために祈りましょう」と言っていて、4人の兄弟たちで指を組んで懸命に祈った話をしてくれたそうです。ハミルさんの母親はアイルランド系移民の娘で、敬虔なクリスチャンだったのでした。

トルーマン大統領は選挙で選ばれた人物ではありません。副大統領から大統領に昇格した人物で、人種差別主義者でした。いまだに、アメリカでは非人道的な原爆投下を正当化するために、原爆によって戦争を終わらせることができたのだという説明を信じている人が多いのですが、少しでも原爆投下に至る事実を調べてみれば、そのような言説は間違っていることがわかります。

原爆の実験では、爆発地点から等間隔で馬や牛をつないで、原爆の生命体への影響を調べました。言い方はすごく悲しいのですが、私は人体実験の意味合いがあったと考えています。日本が降伏した後、アメリカの医療チームが真っ先に広島に入ったことを見ても、その事実は確かだと思われま<sup>1</sup>す。広島選出の岸田首相がなぜアメリカ大統領が日本に来た時に、広島原爆資料館を案内しないのか、原爆のことを抗議しないのか、私には理解できませんが、何かしようがないと思っているのでしょうか。

さて、イエスは弟子たちと一緒にユダヤ地方からガリラヤへ行く際に、シカルというサマリアの町を通らなければなりません。そこにヤコブの井戸があって、イエスは旅に疲れてその井戸のそばで休んでいたのです。時間は正午ごろのことです。そこにサマリアの女性が水を汲みに来ました。朝夕ではない時間帯に井戸に来るといことは、他の人に会いたくないからかもしれません。そこでイエスはその女性に「水を飲ませてください」と頼みます。すると、その女性は「ユダヤ人のあなたがさあリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいとたのむのですか」と言ったのでした。この返答は、当時のサマリア人とユダヤ人との間にあった確執から見れば当然の反応です。サマリア人はエルサレム神殿での犠牲祭儀とは別に、犠牲祭儀を行う場所を独自に持っていたからです。ユダヤ人から見れば、エルサレム神殿の祭儀を否定するものと映ったので、ユダヤ人はサマリア人を汚れた者とみなしていました。イエスもユダヤ人です。当然サマリアの女性は関わりを持つこと自体避けるところです。ユダヤ人であるイエスもサマリア人に声かけをすること自体あり得ないことでした。

ところがイエスは『この水を飲む者はだれでもまた渇く。わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る』と言うのです。通常ヤコブの井戸から汲む水を飲むならば、その飲んだときは喉が潤うのですが、喉が渴けばまた水を飲みたくなるわけです。それは当然のことです。人間の体は水分が大半を占めていますので、体を維持するために水は欠かせないものです。ところが、イエスはそういう生物学的なことではなくて、人間と

しての生き方のことを言うのです。

そのことは、イエスがこの女性にいままで5人の夫がいたことを指摘していることでわかります。5回の結婚と離婚を繰り返してきたのです。しかも、今のパートナーは夫ではないことまで指摘します。おそらく、新たな結婚相手となるか否かを見極めている状態なのでしょう。言い方を変えるならば、このサマリアの女性は自分にふさわしい魂の同伴者ともいうべき夫を見つめたいと考えていたから5人も夫と結婚していたとも考えられるのです。そういう意味で、この女性は魂の渇きを抱いて生きてきたともいえるわけです。

ですから、イエスは「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」と言うのです。そのあとに、5人の夫がいたこと、現在のパートナーが正式な夫ではないことを指摘するのですが、この指摘はこの女性の身持ちの悪さを糾弾しているように受け取られる危険性があります。

ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下の後、原爆製作の最高責任者で、英雄のようなオツペンハイマーが大統領官邸に招待されるシーンがあります。執務机から立ち上がったトルーマン大統領が、にこやかに「おめでとう」と握手を求めたのに対して、オツペンハイマーは暗い表情で「閣下、私の手は血塗られたように感じます」と答えます。

それに対してトルーマンは「ヒロシマやナガサキが憎むのは原爆を作った者ではなく、落としたりした者、この私だ」と言うのです。オツペンハイマーはそれ以上語ることなく退席するのですが、彼が部屋を出るときに、トルーマン大統領は秘書に向かって聞こえよがしに大声で「あの泣き虫を二度とここへよこすな」と言います。イエスがサマリアの女性の内面に向けて真実に目を向けさせるように語りかけたのに対して、トルーマンは自分が原爆を落とす命令を下したことを否定されたように受け止めたために、オツペンハイマーではなく、自分が恨みを買う存在なのだと思つて言っているのです。

2

永遠の命に至る水が自分の内面にわき出るといふイエスの言葉は、サマリアの女性に魂の癒しと、生きる希望を与えます。自分が5回の結婚と離婚をして来て、人々のあらぬ噂にとがめられて生きてきた、この女性は自分自身の内面の苦しさに向き合って生きていたからこそ、イエスから「生ける水」が与えられることを受け入れることができたのです。

オツペンハイマーは実験の成功に歓声をあげる所員たちの中で一貫して重苦しい表情をしています。ナチスドイツよりも先に原爆を完成させるという切迫した状況の中で、完成させたという満足感よりも、原爆がどれだけ地球に悪影響を与えるかがよくわからないことを物理学者であるオツペンハイマーは憂いているのです。このように、オツペンハイマーは単に原爆に対する人道的な後悔だけでなく、この地球に対して放射能がどのような悪影響を与えるかということを憂いているのですが、彼には魂を慰める「生ける水」をどのように自分で手に入れるかが、不透明なままなのです。このように考えてくると、イエスが与える永遠の命に至る水を飲むことがどれだけ大切かがわかってきます。トルーマン大統領はもちろん、オツペンハイマーもイエスが与える生ける水の存在に気づいていません。

別の言い方をしてみます。例えば、性能の高い飛行機を設計したいという夢を抱いていた人物が、戦争の時代に遭遇して、自分の夢をかなえるために戦闘機を完成させたとします。確かに、自分の夢を実現させた意味では、自己満足できることです。けれども、戦争という大局的な側面から見れば、自分の夢が戦争をより推進させたかもしれないのです。このように、自分の夢の実現がどのような影響を与えるかを考えた時、オツペンハイマーのように原爆を作ることだけに心血を注ぐことだけでは、自分が真実生きていることはつながらないことになるかもしれないという畏れを常に抱いていないといけなことを痛感させられるのです。